

座談会

# 「地域農業の未来と 女性の役割」



出席者

長尾 道子

「食農わくわくねっとわーく」事務局長

及川かをり

蘭越町農業経営（野菜）

藤原 幸子

愛別町農業経営（酪農）

コーディネーター

太田原高昭

北海道地域農業研究所所長

太田原 今日「地域農業の未来と女性の役割」ということで皆様に話し合いをお願いします。私は旭川農村婦人大学とか、いろいろな女性のグループと大分長いことお付き合いしております。最近農業が全体として厳しいので、農協などで男の人の集まりですと真っ暗な会議ばかりやっているんですけども、女性の集まりだとすごく元気なんです。これが非常に不思議なんです。今、個々の農村はやはり女性が支えているのだなあということ、いろいろなところで感じております。



今日はその先頭に立っている三人の方にお集まりいただきました。皆さんが感じておられる「農村での女性の役割」ということについて縦横に語っていただきたいと思っております。

まず最初は長尾さんからお願います。長尾さんはフリージャーナリストとして、全国の村を歩いていらつしやる方なので、内地の話が入っても良いですけれども、一応北海道の各地の女性の活躍ということで、その中で長尾さんが感じている女性の役割のようなお話を最初にいただければと思っております。

長尾 私は長沼の農村生まれの芽室育ちということで、正真正銘田舎っ子、道産子なんですけれども、家は農業をやっていたわけではなくて公務員だったので、農村には暮らしてはいたのですが実は農業

のことを知らないということが、ホクレンに入ってからいろいろわかってきました。元々田舎の暮らしよりも都会の暮らしに憧れていました。生まれが昭和四十六年で、物心がついたのが五十年代なんです。ですから、テレビもカラーテレビだったし、車もあったし、今の暮らしとさほど変わる生活ではなかったんです。

テレビの中で華やかな世界があって、東京から伯母が来道するたびに、私は「東京っていいな、札幌っていいな」とずっと思っていたんです。でもその時に、伯母がトウモロコシをすごく美味しそうに食べる姿とかはずっと覚えていました。また、私の中の原風景は、十一月頃になると、霜対策のタイヤを焼いている風景だったんですけれども、そんな中で育って私は札幌に生まれました。ホクレンに入って広報伝課というところで、北海道の農業を広く多くの人に理解してもらうという仕事をやっていました。でも私は、北海道に農業があるとは思っていただけでも、北海道の農業が良いと思っているわけではありませんでした。入会四年目で二四歳の時に、北海道農業をPRする雑誌を作れと、編集しなさいと突然言われて「エーッ」と思ったのですが、結局、取材も楽しく編集長として六年間やらせてもらいました。

普段当たり前にやっていることが  
とつてもすごいことだ

長尾 取材で農村へ行った時に、働いているすごく元気なおじさんたちもカッコ良かったんですけれども、どちらかというと、そい

で出てくる食べ物や、ちょっとしたおばあちゃんの話し振りだったり、老人の元気な姿とか、「おじいちゃんが溶接をしてこの小屋を建てた」とかいう話を聞いたり、庭のきれいだったり、そういったものに私は



はすごく興味があったのです。こういった所はいいなあと思っていたところに、たまたまグリーンツーリズムとかスローフードといった言葉に出会ったのです。

それをひも解いたら、いろいろな人たちに出会ったのです。今年の春は九州に出たんですけれども、外から見れたことで、かえって北海道をよく理解できたと思っています。

ます。今は本当にこんなに北海道にいろいろな人がいて、こんなに可能性を持っている地域に私は生まれ育ったんだというちょっとした自信と、では私はこれから何をしようかという部分で自分自身と葛藤しています。ただ、自分の世代は先代がやってきたことと知らずに生活している人が明らかに多いのではないかと思います。普段当たり前にやっていることがとつてもすごいことだということを、私は何かを通して伝えていく仕事をしたい、紹介する本を作りたいと思っています。今はそのためのきっかけになることをいろいろしています。

とにかく北海道の女性はすごいと思うたのは、取材をしている中で一つの言葉に感動したりというのが、やはり女性のことが多かったんですよね。男の人が「本当に農業は辛いし大変だし・・・」と言って

いる中で、お母さんたちは「まあそれでも結構やっていけるもんよ」とか（笑）、「結構楽しいわよ」とか言っていますが、私から見ると楽しんでそうではないんですよね。でも「楽しく考えないとやってられないじゃない」とか、そういう生きていく運しさをみたいなものを持っていて、逆に私はそういうところに感動したというか、「この稲穂を見て、美しいでしょ」と言うのは男性ではなくて女性なんですよね。こういう人たちともっと関わっていきたい、そのためには先ず自分が動くと思って、今自分からいろいろな所に足を運んでいます。

この間も襟裳に行っただんですけれども、お手製のお肉料理をご馳走になりました。牛を飼っているのは男性ですが、話の中で時々家庭料理の秘訣などを聞くと、やはり母さんはすごいなと思います。飯寿司が出てきて「これは近所の漁師さんからもらった」というように、ご近所との交流なども見えてきます。農村にはいろいろな物がまだいっぱいあるんだという部分をもっといろいろな人に伝えていきたい。そして、今の時代に苦しんでいる人とかが農村に來たら何か発見して帰れるかもと思いつながら、日々自分が一番楽しいと思っていることをやっている変な者です。長い自己紹介ですみません（笑）。

**太田原** それでは、つぎは藤原さんをお願いします。藤原さんは指導農業士で町会議員という、女性パワーの最先端を走っているような方です。農村はいろいろな意味で変わってきていますので、女性の位置付けとか役割とか活動の場面みたいなものも随分変わってきていると思います。農業者として、その辺でお感じのことや自分でおやりのことについてお話しただければと思っています。

藤原 大変なご紹介をいただきましたが、私は本当に普通のおっかさんでした(笑)。私は真面目に四人の子どもを育ててきた、本当に真面目なおっかさんです。外に出て歩くのが不真面目というのではないんですけれども、酪農というのは朝が早くて夜も遅い、夜星朝星というのが本当に実感できる労働時間でした。昭和四十七年に結婚したんですけれども、ちょうど減反政策も始まって町へ町へと出て行く人が多かった中に、私はその波に逆らうようにして夫が



住んでいる静かな谷あいのほうに行っていたんです。その時にみんなから、「さっちゃんば農家というものを知らないから、農家に嫁に来たんだよね」と言われました。私の父親は土建業を営んでいたのですが、私はその手伝いをしていたので、私はその手伝いをしてきたのです。ですから経理関係とか入札関係とか保険の仕事とか、そういうのを一手にやっていました。土建業界もその頃は男の社会で、入札といってもほとんど男の人がやっていた世界です。父の秘書兼雑役係として手伝っていたものだから、いろいろな所に顔を出したりはしていたんです。気の荒い人たちが多いので、ちょっと間違えたらすぐに怒られる。本当に疲れてしまって、「農業青年と一緒にいたら癒されるかもしれない」と思って、目が田舎のほうに向いたんです。

夫と私は知り合って一週間で結婚を決めました。夫は前々から私を

見ていたのですが、私は農家を知らないし、父親も母親も、すごく心配しました。周囲の反対を説得してお嫁に出してもらったのです。最後は「仕事はできないかもしれないけれども、体だけは丈夫に育てたから」って送り出してくれたのです。

### 私に夢を語ってくれた夫

藤原 親を説得している間に、夫は私たちの住む家を建ててくれたんです。営林署の官舎を払い下けてもらったので、毎朝乳搾りが終わった後に、四〇kmぐらい離れた旭川まで友だちと一緒に壊しに行つて、壊した材料を持って来て家を建ててくれたんです。屋根だけトタン屋さんに頼んで、後は壁もお風呂も全部自分でつくってくれました。

私は家を建ててくれたことも感激だったけれども、何よりも夫が自分はどうしたいんだという夢を私に語ってくれたというのが、私にとつてはすごく新鮮な感動に近いものがあつたのです。私は農家の人と一緒にいるという不安は全然なくて、社長夫人になるという(笑)気持ちでした。だって農家を経営している企業家だと思つたものですから。それで実際に結婚したら、「うちは今年から青色申告をするから、よろしく頼む」ということで、帳簿一式を全部渡されたのです。その中には借金もありましたよ。新婚旅行も借金、指輪も借金(笑)、そういう経営だったけれども、夫はマイナスの経営の時から「計数管理に力を入れたい」と言い、その分野を私に担当してくれということでは

した。私も子どもを育てながらできることといえば、そういう計数管理がいいかなと思ってやりました。

では牛舎に一切行かなかったのかといったらそうではなくて、嫁に行った次の日から三〇頭分ぐらいのサイレーシ出しをしたのですが、サイロに入ってスコップで出すのはものすごく疲れるんです。シバレているから、それをツルハシで崩しながらやるんです。それと乳搾りもずっとやってきて、長女が四歳になる前に四人目の子どもを産んだんです。カッ「良く言えば、子どもはうちの子どもじゃないので、兄弟でありながら友だち同士のように育っていくように」というのが夫の言い分ですけど、自然に神様にお任せしていたというのが私の本音です。

その子どもたちもチャンと育ってくれました。今の場所は子育てや牛を飼うには良い環境だけでも、交通が不便でバスから降りて四km以上の山道をこなくてはならないのです。街灯が一本もないのでライトを点けて自転車でするのですが、夏の夜などはそこに虫が寄ってきて顔中虫だらけなんです。友だちは家の前でバスを降りるのですが、お姉ちゃんは文句一つ言わないで、朝も先頭になって妹や弟が後ろに付いて冬は当然ですが歩いて通ったのです。だから、「自分で掃除や洗濯ができるようになったら旭川へ出てもいいか」と言われた時には、「うん、いいよ」と言ったのです。地元にも高校はあるんですけども、旭川の高校を受けてみんな旭川に出てしまったんです。

私は、一人行っても「三人残っているからまあいいわ」、二人行っても「まだ二人いるからいいわ」(笑)、三人行っても「まだ待望の男

の子がいるからいいわ」と思っていたのですが、その子が行くとなつた時は一人でサイロに入って泣いたことがあります。サイロの中で泣くというのは、誰にも見られない場所だということと誰にも聞こえないということ、私もそこで思い切り泣きました。自分は何も悪いことをしていない今まで本当に肩寄せあって暮らしてきたのに、「どうして離れ離れにならなければいけないんだ」と泣けてきたのです。その泣き声は誰も聞いていなくてもサイロがちゃんとして聞いていて、それを跳ね返してくるんですよ。その跳ね返った自分の声を聞いたら、他所の町で冷たい水で洗濯しながら頑張っている子どもたちのことが思い浮かび、「いつまでもメソメソしてないで母さんも頑張らなきゃあ」と思って、すぐに気分は変えられたんですよ。

## こんなに山奥だけど私だって 頑張っているのに

藤原 末っ子が中学生の時に「お母さん、今まで自分たちのことを一生懸命みてくれたから、今度はお母さんが好きなことをしたいよ」と言ってくれたんです。その好きなことが選挙だったのかと言ったらそうではないんですけれどもね(笑)。結婚して二〇年目ぐらいの時に、「本当に自分は頑張っているのに誰も私を認めてくれない」と思ったのです。結局、牛舎と自分の家とたまにAコープに行くぐらいの行動範囲しか、私はなかったんですよ。こんなに山奥だけど私だって頑張っているのにといい思いがあって、何かで自分を表

現したかったですよね。そういう思いを生活改良普及員の方が感じ  
てくれて、北海道主催でやっている「農村に生きる女性をテーマにし  
た作文コンクールに応募してみないか」と言ってくれたのです。なか  
なかとまらなくて、締め切り当日にファックスで送った原稿が知事  
賞になったのです。作文コンクールの発表の時もその生改（生活改良  
普及員）さんが何度も家に電話をくれるけれども、私は乳搾りで全然  
出られない。そうしたら八時過ぎまで何回も電話を掛け直してくれ  
たんです。ばあちゃんには「またあとで、またあとで」と用件を言わ  
ないで、ようやく私につながった時にその生改（生活改良普及員）さん  
は「おめでとう」と言ってくれたんです。知事賞だということを伝え  
たかったんだけど、私に直接言って、私が喜ぶ反応を自分も味わ  
いたかったということでした。そのことがそもそも私の社会進出の第  
一步だったのかなと思います。

何年か前になりますが、愛別町にポトピアの誘致運動があったの  
です。「ポトピア」は「場外舟券売り場」というもの自体を私たちはよ  
く知らなかったのです。「そういうものは自分たちの町にはいない、  
似つかわしくない」という思いがあって、お母さんたちと一緒にお父  
さんも巻き込んで、「こういうものか勉強しましょう」ということで  
調べたんです。そして、そのことを自分たちだけのものにしておくの  
はもったいないからということと、新聞に折り込みを入れて町内に  
配ったのです。そうした中で、皆さんと情報を共有することの大切さ  
を知りました。「自分たちはいらぬと思っている」という陳情書を出  
して、議会の傍聴にも行きました。結局、議会で採択されて、愛別  
には場外舟券売り場は誘致されなかったのです。

## 町づくりはお母さんの発想で

藤原 町づくりというのはこういう風にやっていけばいいんだ  
など、お茶飲み話にそういう話題が出てくるのが良かったのかなと思っ  
ています。本当にお母さんの発想というか、何もわからないお母さんの  
ままでいいから、いろいろなことをやっていこう、というのが議員に  
なったきっかけかなと思います。単純に言えば「人口の半分以上は女性  
だし有権者の半分は女なのに、女性の議員が全然いないのも不自然だよ  
ね」という発想から、私も議会に出て活動したいと思ったのです。

最初は落選して二回目にやっと当選させてもらったので、選挙は四  
回やっていますが、議員は三期目です。そのたびに票が伸びているん  
です。今回は、経済・環境の常任委員長になりました。経済といっ  
たら農業とか教育関係が入り結構大変ですが、他の仲間に助けられて頑  
張っていいこうと思っています。

太田原 まだまだ話がたくさんありそうですね（笑）、こ  
の辺で及川さんにバトンタッチしてください。及川さんは新規就農と  
いうことで、「地域と農業」では大変澁刺としたエッセイを書いてい  
ただいており、私も毎号楽しみにしているのです。新規就農という立  
場でご覧になった農村・農業、女性の役割というようなことについて、  
そもそも始め辺りから感じておられることをお話いただければと  
思います。

及川 平成十年までは普通のサラリーマン一家だったんです。夫が突然、「引越したい」と。転勤とかではなくて「引越したい」と言うので、そろそろアパート住まいも区切りをつけるのかなと思ったら、「蘭越町という所に引越したい」と言うので、みんなで単身赴任かなと思ったのです（笑）。何となく予感はしていたのですが、まさかと思ったら「会社、もう辞めたんだ」と言うのです。潰れたかなと思っただけですけども、会社は潰れていませんでした。夫の希望で、二年かかって円満退社できるように仕事を片付けたんだそうです。

その二年前、平成七年に関わった蘭越町の「村おこし、町おこし」のコンサルタントの仕事で、蘭越町の産業課の方と農業委員会の方と話をしている、「コンサルさんはそれこそ口で畑を耕すのが商売だからね」と言われたんだそうです。町の青年部で「みのり会」という会があるんです。青年部ですけども五〇代です（笑）。その方々と話した時に、「俺らは七〇歳まで青年だ」とおっしゃっていて、ついつい売り言葉に買い言葉で「じゃ、俺もやる。入れてください」と言ったそうなんです。その約束の二年間で仕事を片付けて、引越すぞというので行って行ったのが蘭越町だったのです。

どうやったら

職業欄に「農業」と書けるのか

及川 平成七年ですから、その時にちょうど新規就農支援とい

うのが始まったのです。その支援がなかったら、きつと今はないと思っただけですけども、道の担い手センターを通じて就農ということになったのです。私は、誰でも農家になれないらしいというのはわかっていましたけれども、どうやったら職業欄に「農業」と書けるのかということもわからなかったのです。



平成十年から十三年に農業委員会の方に認定されるまでは、職業欄には「農業見習い」というふうには書いていたのですが、地域の皆さんに応援していただいて、今では職業欄にちゃんと「農業」と書けるようになったのです。ただ、今でも農業という職業がどういう正体を持っているものなのかはまだわかっていないのかもしれないと思っています。

蘭越町というのは見たことも聞いたこともない所だったんですけども、夫がいきなり「お前を子どもの頃に引越させてやる」と（笑）。若返れるのかなと思っただけですけども、ただ回りに小川があって田んぼにおたまじゃくしがいて砂利道で、そういう感じの所だったんです。農村というのはものすごく閉鎖的な所だということに思っています。私たちがいなよそ者が生活できるんだろうかととても心配だったんですよ。夫が農家の長男坊で、いずれ自分の家を継ぐために帰るというパターンとは違って親戚もいませんし、知り合いも役場の仕事で知り合った非農家の方とみのり会の農家の方という感じでした。夫

は顔見知りだからいいですよ。私はこのままついて行って、そこ生活できるのかなーと一瞬思ったんですけども、まあ何とかなるだろうこと。

そして行ったところ、父さんも母さんもいっぱいいいて暖かく迎えてくれたんです。引越しをしている間中、みんな入れ替わり立ち代わり来てくれて「晩に食べなさい」と言っていて、鍋ごと煮物を持って来てくれたりしたんです（笑）。名前を覚えるより先に「及川さん、及川さん」とみんなが声をかけてくれて、気が付いたらもう五年経っていたという感じで、すごく自然に居着いちゃったのです。

### 「女が前に出るといのはどうもねー」

及川 今よく「女の人は元氣、農村の女性は元氣」と言いますが、いまでも、いま急に元氣になったわけではきつとないと思うんです。外から入った人間として見ると、家庭の中か地域の中ぐらいいいかな女性というのはエリアを持っていないんですよ。外に出るためには段取りをしたらじゃないと出られない。その段取りがなかなか厳しくて、「きちっと段取りをしないと出してもらえない」と女の人は思っているんです。結構気が強いので、「やることをやらなければ出たくない」というのもあって、出る機会を失っているのではなにかと感じています。ただ、それを一歩突き破って外の世界にはたばたつと羽ばたいて行った人は、「ものすごく力を発揮しているな」と感じしているんです。

けれども、農村の女性は「家の中で慎ましく」というのが私たち外から来た人間のイメージなんです。農村の人はのんびりしててとか、人が良くてとかというイメージがどうしてもじゃまになっているのかなと思います。外に出る人は慎ましくないのか、夫をないがしろにしているのかといったら、そんなことは決まてないんですけれども、「女が前に出るといのはどうもね」というイメージがじゃまをしているんですよ。女の人はもっと活躍できるのに、と思うんですけれども。

太田原 藤原さん、農村・農家での女性の立場やいわゆる社会進出についてどう感じていらっしゃいますか。大分変わってきたと思いませんか。

藤原 私は社長と結婚したつもりだったから、まず農家での立場については全然違和感がなかったです。でもそれがどんなに恵まれていたかということが、婦人部だとかに入って他のお母さんたちとお付き合いするようになってわかってきたんです。農家の女性にはお小遣いもあたっていなかったり、五〇歳になろうとしているのに自分の自由になるお金もなくて、子どもに必要なお金などもいちいち使い道を言っていて買っているという人がまだ多かったんです。私は最初から給料制でしたので、そういうことに全然気付かなかったんです。そういうことが当時にかに恵まれていたか、親にそのことを言ったら、「貯金も何も財産が無いから任せただよ」と言われました。無い無いと言ったってあるじゃないですか、借金が。



## 我が家の情報公開

藤原 お嫁に来て、「貰ったお金は自分が自由に使ってもいいものだと思ってた。だけど自分の家にこんな借金があるとわかっていれば私だって我慢できた。お小遣いをそんなに貰わなくてもよかった」と、借金があるということをずっと後で聞いた人もいるんです。今で言う、我が家の情報公開を最初からきちっとしてくれた、だから私はうちの舅と姑に感謝ですね。

何年か前から、帳簿づけは農家の母さんたちがほとんど担ってきていて、来年からは白色、標準もなくなってしまうので、これから本当にお母さんたちの出番がくるのかなと思います。今はただ生産するだけではなくて、それに付加価値をつけて企業化するお母さんたちが増えています。私も平成十年に自分たちのグループで、アイスクリームの生産販売を立ち上げました。愛別町では初めてだったので、それに続けとばかりに他のお母さんたちも立ち上がりました。農家の経営はお父さんが主体であったかもしれないけれども、企業化で始めた加工部門は自分たちが主体で、加工から販売、そして帳簿・申告、全部自分たちがやるわけです。だからお金をいじったりするのも全然苦になっていないし、婦人部等の総会の資料作りも自分たちでできるようになりました。やはり女性というのは何でもやればできるし、お母さんたちが家で黙っているよりは、外に出て明るく「二〇二〇元気なほうがお父さんたちも幸せを感じているのかなと思っています。また、そ

れが町の活性化につながるのです。

## 母ちゃんのすごさの秘密

太田原 長尾さんは、あちこち歩いてそついうお母さんたちをたくさん見ていませんか。関心されたことや元気のモトなどについて、少し思いつくことをお話ししてください。

長尾 “基本的に朝・昼・晩、ご飯を作って仕事をしている”という、そのこと自体が私はすごいと思うんですね。また、農村に行けば二世三代三世で暮らしていますが、まずそこがすごい。友だちや妹が結婚してよく言っていたのが、「主婦業とはこんなに毎日毎日ご飯を作って生きているんだ」と（笑）。それをしながら働いている農家の主婦と言うのは本当にすごいなと思うのです。それをお父さんたちが手伝っているという雰囲気は、見ている限りあまりないんですよ。でもおばあちゃんが子育てを結構支えていたりする姿とかもすごいなあと思います。私は、核家族で育っているから想像ができないというのもあるんですけども。

もう一つは、なにに何でも手作りをしているところ、作物を作っている、加工品も作っている、漬物も何種類も漬けている、夏場は浅漬けを作って、秋になったららっきょう漬けて、味噌を作る。ウメも漬けて、聞いたら山菜も取りに行っているし、とにかく本当に働き者だなと素直に思います。

及川　でもそれは秘密があるんです。大きな声では言えないんですけれども、引越してすぐに思ったの。夏場にキリギリスのように遊んでいると、冬食べる物がありません(笑)。だから夏の間はせと塩漬けしたりいろいろな加工品を作ったりして、普通に冬場の食べ物として加工しているんだと思いました。最初の冬は頂き物で「すみません、すみません。美味しい、美味しい」と言いながら過ごしました(笑)。札幌だと吹雪で買い物に行かれないといつても、我慢すれば何とかなるでしょう。本当に道路が曇がっちゃったり、コンビ二ができたのもここ二三年の話だし、五時になったら農協のスーパー、Aコープも開まつちやうし、人も歩いていないんです。大型店は車で三〇〜四〇分ぐらい走らないとないんです。他に商店はあるんですけども、知っている人は「何とかなきゃ、開けてよ」と言っ入れてくれるのですが、私たちはそういうお付き合いがないからじっとしていなければいけなくて。

### 農村は段取りがすごいぞ

長尾　その段取りのすごさだと思うんですよ。話は全然違いますが、でも、「豊か」というのはもしかしたら、しっかりとした段取り「なのかなあと」思って、私もずっと感動しつばなしたたんですよ。何でかなと思った時にある方が「農村は段取り」と言われて、なるほどと思ったんです。冬に歯舞に行ったら、あるお母さんがソバを打ってくれて、そこにポコンと豆腐がのっていたんですよ。「これ何

ですか」と聞いたたら、ちよつと年末だったので「年末は外に出られないかもしれないから、豆腐を作っておく」と。その豆腐がいろいろな姿になって食卓に出てくるんです。なるほどと思いました。大豆を豆腐にされていて、納屋の奥のほうに豆腐置き場がきちんとあって、そういう食べることの段取りからいろいろなものが見えてくるのか……。

親元で就農する友だちですけれども、親元では今まで二人家族だったのが若夫婦が戻ってきて全部で四人になるからといって、最初に母さんは自家用野菜を作るハウスの大きいのを建てたというのです。そこが豊かな部分なのかなあと思って、私はすごく感動したんです。よく北海道の農業を語る時に、北海道の専門農業がああだこうだ、これからの農業は先行き暗くてどうしようもなくてという話ばかりするけれども、農村で一年間暮らしていくだけの自家野菜を作られている人たちに、日本の食料自給率が四〇%だからどうこうと言っても何の通用もしないだろうなと思います。逆にそういう人たちと関わって、自分たちが少しでも豊かな生活をするための術とか、そういう段取りを覚えていきたいなとすーっと思っていました。

太田原　いや、とても面白い話ですね。よく「男の会議は真っ暗で、女性は明るくて元気だぞ」と言つと、男の人たちは口惜しがって「いや、女は何も知らないから元気なんだ」と言つんですよ。何も知らないというのは、つまり今の農業情勢だとかWTOだとか、そういうことを言っているわけですけれども、今の話を聞いたら逆に男は何も知らないから非常に不安を持っているとも言えますね。女性はそ



ういふふうには確実に足元から固めてきているから、割りに楽観的に前を見られるのかなと、そう思いました。

長尾 “食べるという行為から考えよう”という時に、その家のご主人は“どうやって食べ物を作ったり加工しているか”ということ、本当に知っているのだろうかと思います。お母さんたちは農業者でありながら実際に料理をしているんです。足元にすごいものがあるじゃない、といつも自分は思っています。実はそのお母さんたちも決して自分一人で野菜を作っているのではなくて、お隣さんからいただいたりお隣さんにあげたり、町の人に来て交流もしている、小さいながらもしっかりとした交流があったりとかするんです。だから村というのは一人では生きていられないというのわかってくるのです。私もいろいろな村で生活してみても「うん、なるほど」と気づかれました。だからわずらわしい付き合いかもしれないけれども、それは生きていくためには必要なものです。今になって私は村のわずらわしさが素晴らしさに見えるようになりました。

太田原 そうですね、暮らしの力みみたいなものの素晴らしさですね。都会の生活ではそのような段取りはないんでしょうか。

長尾 都会に限らず、農村に住んでいるけれども、私みたいに農業者でない人はそういう力はないわけですよ。農村といっても、たとえば蘭越町全員が農家かというところではないし、では蘭越の町の人はそれだけの段取りをして生活しているかというところ、お母さん

ちは確かにご飯は作るけれども、地元の物を使ったりとか食べ物を大切にしたりというのは、している人もいればしていない人もいる。

### すき焼き、刺身はご馳走じゃない

及川 たった五年間だけでも、住んでいて「あ、この頃変わったな」と思うことがあるんです。私のご近所では、お盆とかお正月と

かには、本家さんにいっぱい親戚が戻って来るんです。そんなに買い物に便利な所ではないのに、一〇〜二〇人の食事をパッとお母さんが準備するでしょう。やはり町から遊びに来るんだから恥ずかしくないものを出そうと。それは何かといたら町で買ったものなんです(笑)。やはりそれはご馳走じゃない。じいちゃんたちは自分が小さい頃から食べなれた物が食べたいんです。それが懐かしい味で、買った物にはないものなんです。若い人たちはそれが小さい頃は嫌だったんだけれども、でもそれがないと淋しいと感じるようになってきているんです。だから価値観が少しずつ変わってきて、今は堂々と「ここでしか食べられない物だから、贅沢に腹一杯食べていきなさい」と言っていて、それこそ大根から何から大きな鍋に入れて蒸かしたりして、肩の力を抜いた飾り気のない物でもてなすようになったんです。決してすき焼きや刺身がご馳走じゃないということに全員気が付いたんです(笑)。

長尾 やっぱりこの暮らしが良いんだっていうのは、結構外人から言われたりとか、出て行った自分の息子たちが戻って来てそ

ういう物が食べたいとか、そういう外の風があったら自然とそうなるのでしょか。

及川 というか、普通は言はずらいでしょう。ご馳走になりにきて、「ここですき焼きはないでしょう」とは普通の人は言わないと思うんですよね。私の夫はコンサルタントだったから、コンサルタント的な立場から素直な感想を言ったところ(笑)、「なるほどなあ」とわかってくれる人がいたんです。

太田原 外から入って来る人の役割というのは、何かを発見させるといふか、多分そういうことなんですね。だから地域にとっては及川さんのご家族はすごく良い方だったんですね。

長尾 私も最近自分に課してやっているんですが、外の人間というのは何か変えられると思って入って来る人も結構いるんですけども、地域の人やがっていることがすごいというのを引き出すというか、伝えていくことが多分外の人間の役割かなと思うんです。外の人間はお世話になるんだから、何かで返していくにはお金であったり労働力であったりするわけですが、そういった中で農村の場で都会の人との交流ができればいいなと思います。

及川 でも農業というのは職業じゃないですか。ある意味経営的に成り立たないと、それが遊びになってしまつかも知れないんですよ。職業として農業を選ぶといった時は、多分お金では買えないも

の何かがあるだろう」と、それが何かわからないんだけど、そういう魅力があったんです。でも実際に生活していくにはお金がかかるじゃないですか。やはりないと困るので、お金儲けになるかどうかという判断も大切です。でもお金儲けだけで選ぶと、農業は必ずしも魅力的な職業ではないですよ。でも何で選んだのか、何で辞めないのかなとも思うんだけど（笑）、女の人は元気で、男の人でも元気で、力を言わせて「さあ、やりましょう」と言っているわけではないんだけど、間近で男の人が汗を流したり母さんが大変そうに働いているのを、お互いに見える範囲で働いているというのはいらない安心感があるんです。サラリーマンをやっている時は、給料袋にあまり感動しなかつたんです（笑）。でも今は大変な思いをして、たとえば力ボチャがいくらという通帳を見たらゼロが一つ足りなくても、ものすごく大事に思えるんです。

長尾 感動産業ですね。

## 農業経営は男女共同参画の現場です

太田原 段取りから感動産業へとは広がっていますが、今までの話を聞いていて普通のおっかさんとして藤原さんはどうですか（笑）。

藤原 段取りって言ったけれども、経営参画のあり方も影響すると思います。確かに私も先ず子育てをして、帳簿付けをして、

朝晩牛舎に行って、といったら睡眠時間は五〜六時間ですよ。そして本当に三度三度の食事を作って、自分はそれが当たり前としてやってきて、それを良しとしてやってきました。男女共同参画でいけば、農業経営ほど男女共同参画の現場はないと私は思っています。だけどそれが平等参画かと言ったら、そうではないような気がするんですよ。

去年の暮れにスイスに行かせてもらっただけですけど、あそこは本当に女性と男性の仕事が分かれています。男の実習生と旦那さんは牛舎の仕事とか工サ作りで、その奥さんは家の中のことと庭仕事です。そして女性の実習生も入れて、一緒に家の中のことと庭仕事と社会活動をしています。その代わり、家の中のことはきっちり手作りして保存食も作って、食事も心が和むような食事にする。賢いな物があるわけではないけれども、ミルクとチーズとパンとジャムと、本当に保存食ばかりなんですけれども、それでも心の安らぐセティングの仕方をする。そういうふうにならないうちでやっていくんですよ。

日本は全部をしなければならぬから、お母さんたちは大変だと思っただけですよ。お母さんたちが加工部門のほうでやっても、それは自分の仕事の空いた余暇の部分でやっているから、本当にそれで生計を立てていける売上になるぐらい広げてもいいものか、自分の余暇の時間だけである趣味の範囲内に留めておくべきか、簡単に言えば売上が三百万円以上になるか三百万円以下で止めてしまうか、そこで大きく分かれるんです。そこに男の人がちょっと手助けをしてくれたら、多分売上が伸びて企業化できるお母さんたちもあると思うんですよ。

ね。女の人がもうちょっと出たいなあという時に、そこがどうしても平等になっていないような気がするんです。男の人が何かをやるうとした時はそれに全力投球だけれども、女の人が何かをやるうとした時は、家のことを投げ打つてということにはならない。私は議会議員をやらせてもらっていて、誰も「さっちゃん、偉いよねえ」と褒めてはくれませんよね。それより「旦那さん、偉いよねえ」と（笑）。

そして他所に言ったら「私は・・・」としゃべるものだから、「旦那さん、どんな人？」とか「どんな顔してるの？」とかよく言われます。私は「無精ひげで、チャールズ・ブロンソンみたいな顔をしている良い男ですよ」と言ってます。本当に私が一目惚れしたぐらいですから良い男だと思っただけですけども、私がこうやって出て歩けるのはやはり家族のお陰というのがあつたんです。家族が円満でなくて、子どももアッチャアチヤ向いてるし、お父さんもアッチャアチヤ向いてる、ばあちゃんともこうだわ、というのは、他所に言つてなんほ私がいろいろな話をしてても説得力に欠けちゃうわけです。だから、家族との関係、特に夫との関係が一番気にしておいてあげたいなと思います。もう一つは、自分の家の経営です。



外に出歩いてばかりで家の仕事をさっぱりしなくて思われて、経営が左前になったら、それも説得力に欠けると思つたんですね。だからなお一層我が家の経営には力を入れて、借金をゼロにしたん

です。自分の子どもでもいいし、新規就農で入つて来た他人様でもいいけれども、そういう人たちに後を継いでもらう時に、借金も一緒に引き継いでもらうのは可哀相だよねということで、私たちは一応借金はゼロにしたんです。

うちの近所でも新規就農に入つた方がおります。その旦那さんは、冬はアルバイトをして生活費の助けにしていたのですが、そのアルバイトがなくなつて、今年は旦那さんの替わりに奥さんが仕事に出るようになったんです。その家は、冬は旦那さんが主夫をして奥さんが外に働きに行つていらっしゃるんです。このご夫婦は、たまに外の仕事と家の仕事を交代することがあつたんです。旦那さんが雪下ろしなんかをして「えらい、えらい」と言つて帰つてくると、奥さんもどんなに大変なのか自分も体験すると言つて、雪下ろしに行くんですよ（笑）。その間に旦那さんが主夫だから茶碗を洗つたり、子どもを保育所に送り迎えしたりして、反対の立場に立つてみるということをやつていらっしゃるんです。私はそういう若い人たちと結構お付き合いがあるんですが、すごく「良い風」を私たちにくれるのです。他所から来た人たちのおかげで、私は愛別で生まれて愛別で育つてちよつと場所が変わつたぐらゐの生活しかしてないんだけれども、本当に「良い風」を受けながら生活できているなあと思います。

先ほど食べ物と段取りの話が出たけれども、そういう準備が受け入れる農家自体にできていますよね。私は嫁に来て三三年になるんですが、姑がデンプンを作つてくれたんです。家にはかつて皮からくすずから捨てる「ゴミ」がないくらい全部炊いてやつていた、生「ミミ」サイクラーと呼んだ大型犬がいたんですけれども死んじゃつたので、くすずが余つ

たんですよ。ばあちゃんはもつたないから何かできないかと言っています。くす芋を一生懸命おろして、バケツ二つにそれをさらしておくんです。そして何日か経って「これだったんだよ」と見せてくれたのが、真っ白な雪の花のようなデンプンだったんです。私はそれを見た時に、今まで三〇年以上も一緒に暮らしてきて、味噌やこうじは知っていたけれども、おろし金とバケツと水というあり合わせの道具でデンプンを作ってくれたというのがすごい感激で、喜んでそれを唐揚げやお餅の粉に使ったりしていたら、またそれを作ってくれたんです。

それも引き継ぎたい食文化だし、こうやってしゃべることも大事な文化、食べることも文化、そして作ることも文化だと思ったら、うちのばあちゃんは八三歳だけでも叱咤激励して（笑）、まだまだいろいろなことを教わりたいたいなあと思っています。

### “美味しさ” ってなーに

及川 長尾さん、今の話とかを聞いていて、どう思いますか。私も思うんですけど、農家のお母さんたちが作った物を食べてみたいと思っでしよう。

長尾 めちゃめちゃ思います。変な話ですけど、「まちづくり」とか「加工品開発」の会議とかでは、「こういうところで話されるものは欲しくないな」とも思っで聞いているんです（笑）。聞いた後にいつも隣のお母さんとかに、「お家でどんなのを食べている

んですか?」とか「今日の夕飯は何だったんですか?」とかつて聞くと、「フキの味噌を作ったのよね」と言われて、そっちが食べたいと思っでます。何でもすぐ商品化して製品で売ろうとするけれども、私を作った話を聞いて、一緒に作りながら食べたいですよ。

及川 わたしもそう思っでます。でもコンサルさんと話をしていると、すぐにテーマパークをつくろうとするんです。でも農家のお母さんたちというのは、たとえば機械で刈った後に落とした大豆を集めて何か作ったりとか、商品にできなかった大根を使って何か作ったりとか、回りの手の届く所にある物で美味しい物をバツと作るでしょう。農家のお母さんが「あ、閃いた」というようなことですよ。そういうのじゃなかったら意味ないのにと思っでただけども、ジャムにするためにわざわざイチゴを作ったりという話になってしまうのは残念です。

藤原 私はよく「お前、ケチだ」と言われるけれども、本当にもつたないという気持ちがあるに働いちゃうんですね（笑）。だから梨でもポタツと落ちたやつの方が美味しいんですよ。すぐに食べるなら絶対に完熟が美味しい。自分たちで手間ひまかけて作ったものは、本当に葉っぱ一枚でもイタマシイというか、もつたない。だから最後まできれいに食べようという気持ちで、冬も腐らないうちに加工してということになるのかなと思っでます。

太田原 多分そういうものが、食べて美味しいんでしょね。気

持ちが味に染込むというか、単に化学的・物理的な要素ばかりではない生活の文化としての食べ物の味わいというものでしょうか。

長尾 ホクレンにいた時に、美味しいというのをよく味覚分析するんですよ。お米も良食味米とタンパク何とかというのをやっていて、それはそれで一つ大切なことかもしれないけれども、作っている人がなんとなく想像できてその人と一緒に食べるとか、そういう物を家族と食べるとか友だちと食べるとか、その方が美味しいという自分なりの概念があるんです。自分が知っている人から買う時に「農業、何回撒いたの？」とか「どんな肥料を使ったの、どんな土の耕し方をしたの？」という話はしないじゃないですか。たとえばおばあちゃんが「今年は虫がいっぱい出て大変だった」という話をした時に「そうか、それじゃ大変だよなあ」とか、一緒に草を取りながらおばあちゃんから「今年は草が多かった」と言われると「やっぱり」とか思う気持ちが大切じゃないですか。だからよくトレーサビリティーの話とかもするんですけども、ここに履歴がきちんと書いてあるから安心とかじゃなくて、そういうことも必要ですが、安心というのはもっと人と人とのつながりだったりしませんか。

やはり作っていない人間として、作ってもらっている人の所に足を運ぶというのが、自分がやらなければいけないことだと思っっているし、逆に行ってすごいと思ったことは「すごい」と言い続けていきたい。農業はそんなに簡単なもんじゃないけれど、農業は今まで重い部分ばかり出し過ぎていたのかなと思ったりもするんですよ。当たり前前をやっていることすばさをなんでもって言うていけないのかなと

思ったりもするんですよ。

藤原 でも言うほどのことでもないですよ。

長尾 でも言うほどのことだと思っんですよ(笑)。

太田原 だからそれをするのが長尾さんなんですよ。地域の人が自分はずいずいしょとは言えないことを橋渡しすることが長尾さんの役目なんですよ。

## 知らなかったら聞いちゃおう

及川 私たちは新規就農者で、自分たちの目にするもの聞くもの初めてでしょう。ついつい知らなかったりわからなかったりして聞いちゃうんですよ。そうすると農協の人たちが「また、及川さんかい」と言うんだけれども(笑)、近所のおじさんに聞いても「さてな」という感じで、実はおじさんたちの知らないこといっぱいあるんです。お米の補助の関係で言う補助金の名前というのは毎年変わるんです。共保証とか緊急何とか対策事業とか、いろいろな名前前で通帳に入るのでしょ。これって何に対する何の保障なんだろっ、っていつことを、誰に聞けばいいのかもわからないですね。とにかく農協の通帳に入ったのだから、農協の人に聞いてみたら「さあてなあ」と言われて……。

でも農家の人たちは割と無頓着というか、わからないんだけども



聞かないんですよ。そして自分のことも言わないんです。ただものすごく自分の仕事には自信と責任感があって、選別にはものすごく神経を使って緊張してやっているから品物を見ていただければわかる



と言っています。確かに立派な物だけれども、それが市場にあって市場から仲買さんによって、そしてスーパーにあって、スーパーに置かれた時には、「あのおっさんが作ったんだから、美味しいよ」と言ってくれる八百屋の元気なおじさんがいなければ、黙ってそこに陳列されているだけでしょう。それを見て「どうやって美味しいと思えるのよ」と思うんです。作る人も一生懸命だし、買う人も美味しい物を一生懸命選んでいるんだけれども、上手く伝わっていないということなんじゃないかな。

**長尾** いろいろな人と知り合いになると、どうしてもこの産地の物に目がいくじゃないですか。愛別キノコがあると、作っていないと思うんですけれども藤原さんの顔が浮かんできて、愛別、そういえば藤原さん元氣かなという感じにはなると思うんですよ。

**及川** その時に、お父さんたちは良い物を作ろうとって、職人気質というか品物しか見ていないんです。でも、母さんたちは「この葉っぱはこういうふうにならなくなったただなだけども、食べる

てもらえばわかるのにな」と思うでしょう。そういうのって買ってくれる人ともものすごく近い立場の感覚なんです。でもお父ちゃんたちは「これは許せないからはじけ」と。母さんたちは泣き泣き「イタましい、イタましい」と思うでしょう。父さんたちがロットの大きな商売として農業を考えているとしたら、母さんたちは畑で獲れた物を一円でも一〇円でも、とにかく一つも「三」にしないで食べてもらいたいと思っているんです。

### 地元の人は地元の物が欲しいんです

**藤原** 及川さんは直売とかやっていますか。

**及川** 直売もしていますし、トラックで直接売りに行ったりもするんです。でも、周りの大きい農家さんからすれば「そんなのは子ども騙しの農業だ」とおっしゃる、その気持ちもわかるんです。

**太田原** 蘭越のあの直売場は、農協でつくってくれたんでしょう。それは新規も既存も関係なくみんなで作っているわけですね。

**及川** 「もぎたて市」と言いますが、まさかAコープがホクレンから仕入れたものではなくて、「お母さんたちの直売やっていいですよ。店舗を貸しますよ」と言ってくれるとは思わなかったもので、「今の、空耳かな」と（笑）。だって青果売り場があるんですから、営業

妨害でしょう。

藤原 タダで貸してくれてるんですか。

及川 そうです。手数料を二五%は取られるんですけども、本当の手数料だけです。Aコープ店の棚に並べて置いてくれて、会計もしてくれてありがとうございます。

長尾 あれ、売れますよね。やはり地元の人には地元の方が欲しいんですよね。だけどなかったらどうか、私「セ」に行った時に必ず直売所とAコープはだいたい見に行くんですけども、直売所のほうに手が伸びるというのは、やはりその地元の物が買えるからですよね。

及川 そうなんです。お母さんたちは、その人に食べてもらって笑った顔が見たいというような、手狭なんですけれども（笑）、そういう感覚がお父ちゃんたちになかなか通じないんですよね。男の人の夢というのはどの辺にあるかわからないんですけども、その辺で売ることではないことは確かですね。

太田原 そうですね。男の夢はやはり東京で商売することです（笑）。しかし、世の中の流れとしては、私も長尾さんと一緒に、スーパーフード運動なんていうのをやっていますけれども、そういうことが大事だということにだんだん気づいてきますよね。今の話はまさに「地産地消」でこれを進めようというので、今北海道では知事

以下そういうことでやろうとしていますから、そういう時代が来たんじゃないですか。やはり蘭越は、町全体の考え方が進んでいるんですよ。

### 本当の農業ってなあーに

長尾 ゆくゆくは北海道がどんな形であれ農業だったら最高の地域にならないのかなというも思っていますよね。やはり農村に住みたいし、お金には代えられない物がたくさんあるんですけども、同時に農村に住めない理由としては働く先がないとか、農業に新しく参入するにしてもお金も時間もかかる。地元の人に会うと「俺は若いながらもここで職があったから生活できる」という声を聞くんですよね。

農業は専業農家で大きくやっていて東京とか大阪に出しているのがすごいという、わからないけれどもそういうイメージがある。専業じゃないと本当の農家ではないのかなと。「兼業でも直売所だけでも収入があればそれだけでもいい」とか言う、「本当の農業をわかってない」とかよく言われるんですけども、「本当の農業ってなあーに」といつも思っていますよ（笑）。

藤原 でもこれからは形態も変わってくるから、規模とかだけこだわらないで、それこそ少ない面積でも所得率を考えた時にはいろいろな形態が考えられますよね。「ツッカイ」ことがいいことではないですよね。

太田原 その辺をまったく新しい価値観でやっているのが新規参入の人たちですね。この人たちは絶対に大面積をやるうとはしないし、出面さんを雇ってやるうとはしないし、できれば地域の人たちに食べていただいて喜ぶ顔が見たいという価値観でやっているからね。そういうものが育つ農にはなってきたと思っていますよ。

藤原 うちの若い人も新規就農で施設園芸でなかったものだから、二畝の土地を持たなければならなかったんです。その時に農業委員会で結構揉めたのは、私はその人が何をやるうとしているか知っていたから、「有機無農薬栽培で二畝もどつやって管理できるんですか。ましてや出面さんを入れるわけでもなし自分たちでするわけだし、そんな二畝もなくてもいいじゃないですか」と言ったんですけれども、「いやハウスを建てないで施設園芸でないからだめだ」ということで、二町歩借りたんですよ。それでどついうふうになっているかといったら、他の作物の他にソバを撒いたんです。ソバの実をつけるのではなくて、ソバ摘み菜でこれくらいの方に収穫しちゃうんです。それはおしたしとかにして食べるんですね。

太田原 今、それ結構はやっていきます。

藤原 そういうソバ摘み菜でいただくことを、私もそうだったけれども地元の人には知らなかったんですよ。一人とも埼玉と横浜の人たちだから向こうの両親に送って、両親から口コミでお客様を増やしてもらって、産地直送でジャガイモやトウキビ、カボチャなどを

送っているんですよ。あとは自然食品のスーパーに卸しているんですよ。私は地元で「地産地消友の会」というのを立ち上げているのでイベントをやるんですよ。そのイベントの時にはお母さんたちがお店を出しに行くんですが、お父さんがこの頃手伝ってくれるようになったというのは、常設の店舗がないのでお店を出す前のテント建てがあるわけです。早めに行ってお父さんたちがテントを建ててくれる。もう一つは、資料を作ったりシールを作ったりするのを、お父さんがパソコンでやってくれるというお家も出てきて、本当にお母さんたちのやろうとしていることを、少しずつ理解してくれているのかなというのも出てきましたね。

### 男は理屈、でも女は感覚で勝負

及川 私は「みんな、どんな物を食べたがっているんだろう」という話をよくするんです。やはり美味しく食べてもらうためには、食べたいと思っているニーズをキャッチしなければと思って。たとえば、酪農だったら美味しい乳を出すということ一筋に突き進む、自分の作るものにはものすごく責任を持った職人のような人の作った牛乳を飲みたいと思っている人はきつと多いと思っんです。

そういう人たちの牛乳はちゃんと農協に出荷されて、工場で牛乳パックになって商品として流れてきている。だから牛乳パックの牛乳はその職人の味はすなだけども、そういう捉え方をされていないでしょう。どこにでもあるものとか流通しているものとか。「それ

はね、農協がJAっていうから悪いんじゃない」と(笑)、お母さんたちとそういう話になっちゃったんですよ。「農協というと職人扱い響きだけれども、JAという工場っぽいよね」と。でもお父さんが帰ってきてその話をしたら、「その根拠は何だ」とか(笑)、感覚ではわかってもらえなかったんです。

そういうイメージというのは、買うのはお母さんたちだから女の人が感覚でそう感じてしまうものっていうのは結構大きいですよ。お豆腐でも「正直村」って付いていると、何となく手に取って力口に入れてしまう。

長尾 それって感覚ですよ。何となくわかります。

ところで、忙しい時に何を削るかというと先ず食事の時間を削るんですよね。作る時間を削るとか食べる時間を削るとか、「コンビニに行って買っちゃうとか。私は、日々そういう誘惑と闘っています。いかにコンビニを使う回数を減らすかということなんです。町場にいるとお金さえあれば食事の時間を削るということが成立しちゃうんですけども、農村はお金を持っていても成立しないじゃないですか。店は閉まるし、スタンドとかも札幌は二四時間やっているけれども、地方に行く时必须五時とか六時に閉まるからガソリンを早く入れとかなきゃならないとか。町場で暮らしていると、食事の時は畑のことに思いを馳せるといっことを忘れちゃうんですよ。しなくても生きていけるので。

及川 やっていても忘れちゃう(笑)。

長尾 でもそこでもう一度じっくり自分の食べる物のことを考えたりすると、生き方を考えたり、両親に対してとか、回りに対してとか環境に対してとか、徐々に意識が広がっていくような気がするんです。それも自分に近い所からゆっくり広がって行って、じゃあ少しシャブーとかも変えなきゃだめかなとか、お洗濯の石鹸とかも変えたほうがいいかなとか考えてしまうんです。最初はそんなことは全然関係なく、自分が一番きれいになる状況とか自分が都合の良い状況を考えていくんですけれども、いろんなものを見ていった中で農村部、農協の人たちといういろいろ関わることで徐々に自分がこれからどうしていかうかというのを問われているような気がします。そういう部分で農村にはしっかりとあるし、都会の中にも、もしかしたらひっそりあるのかもしれない。そういった部分にもう少し眼を向けていきたいなあと思います。

「無農薬の物を食べたい」と安易に叫んでいたこともありましたけれども、農薬をかけて誰が一番被害があるかというところ、農家の人が直接農薬を被ったりするんですよ。そういうことも知った上で、もう一度自分がどういふふうに入れていくかとか、どういふふうに関わっていかうかということを考えていけないのかなあと取材していています。

そういった中で、自分が農村を訪ねたとき気兼ねなく行ける場所とか人を、いつも作ろうと意識しています。今でこそ道の駅がありますけれども、最初の頃は何もなかったんです。たとえば突然愛別に行きますよね。どこかの定食屋か駅かそういう所しかなかったんですよ。ではそこで交流があるか、農村のことがわかるかといったら、それは

わからないですよ。ちょっとオシャレな食べる場所があるとか、ちょっと休憩できる所がある、ちょっと思い立ったら体験する所があるというのが、その町その地域にあったらいいなというも思っているんです。

太田原　そろそろ時間なので、これからの夢をぜひ聞きたいと思っっているのですが、長尾さんからお話してください。「九州の村」というなかなか素敵な本の制作を手伝っているそうですね、それに触れたお話も聞かせてください。

### 農村で日々暮らすことの凄さを伝えたい

長尾　自分は農村が嫌いで農村を出た負い目もあるというか、札幌で働いてきすぎました。二〇代を送っていたんですけども、その中で自分を見つめ直すチャンスをもらったり、考える機会を与えてくれたのが農村であり、そこで暮らす人たちだったんですよ。だからそういう人たちが普通に持っている物をもう少しおすそ分けしてもらいたいなということと、逆に何か都会に住んでいてもお役に立つことがあればぜひとも関わっていききたいという気持ちがあります。強く、その橋渡しになるようなことがしたいなあと思っています。私の場合は短い期間だったけれども、取材をして町の人に農村の情報を伝えるということをやっていた関係から、実際にその本を読んで移住されて来た方にも会っていきまして、そういう橋渡しになるよ

うな本というものにちょっとこだわっています。

北海道が好きになったりすると、多分もつと北海道の物を買う人が増えたり、もつと北海道に来る人が増えるのではないかと思っっています。そのためには、北海道は「すごいんだぜ」ということをいろんな人に伝えていこうかなと思っっているんです。農業の大変さとかそこに日々暮らすことのすごさとか、農家は自分と本当に関わっているんだということ伝えるものを作りたいなあと思っっているんです。

実はこの「九州の村」と言う本に出会ったのはなんと北海道の農家さんの家です。しかもすごく元気なお母さんたちばかりで、「こんな家があるよ。北海道にもあるといいわね」というのにも触発されたりしたのです。この本にでてくる地元の人たちが普通に食べている物が実はすごいのですが、「こんなの普通よね」と言っっているお母さんたちの逞しさみたいなものに「すっげえ」と感動したのです。



九州に行っ、数々の美味しい物や棚田の景観に感動したりして、もう一回北海道に戻って来た時に、北海道にもそういうのがたくさんあったということに気づいたので。じゃあ私はやっぱり北海道のすごいもの、そこで暮らしていくために生まれた技術とか伝統とか、いろいろなものがあるから、それをもっと楽しくといったら変ですけども、伝えていけたらいいかなあと思っっています。

太田原 せひ実現させてください。お手伝いします。  
では、及川さんがこれからやりたいことを紹介してください。先ほど藤原さんが話されていた「新規参入者が与える影響」みたいな話を聞いての感想も交えてください。ああいう話を聞くとやはり自信を持つでしょう。

### 当たり前前と言う感覚から脱却して

#### 一から勉強

及川 自信というか、とにかく続けていけたらいいなと思って一年一年やっているんですけども。今まで農業という職業はすごく遠い世界だったんですけども、自分がやるようになって、今まで自分は消費者だと思っていました。今度は生産者になった。でも生産者でも消費するし、消費者だって生産に関わったってかまわないのではないかと今年一年感じました。自分が消費者であった時のこと、生産者になったと思いついた時のことを考えても、作るの専門、食べるの専門という感覚しかなかったですね。新聞やテレビのニュースでは、「これは危ないから食べてはいけない」というニュースしかどうしても出ませんよね。そういうものにすごく敏感になって、自分が食べたいと思う物を選ぶ基準というのは何だったのかなと思った時に、やはり値段ではだめだなと反省しているんです。手近な物でお金を出せば買えるんですけども、ちょっと考えて食べてもいいのかなと、難しいですよ。地産地消とかス

ローフードとか、言葉はよく耳にするようになりましたけれども、そういう意識を普通の感覚にまでするというのはとても難しいと思うんです。その時に、新聞だとかニュースだとか雑誌だとか、眼や耳の刺激というのはすごく大事だと思うので、私たちは物を作りながらですけれども、なるだけそういうことは口に出して言おうと思っています。農家の方は言わないですよ。

消費者の人たちも何を基準に買っているのかということも、声にしては伝えられないですよ。そして今中間地点にいるのは流通なんです。そこでは売れる物・売れない物をきっちり分けてしまっています。売れた物が売れる物というふうになってしまっていますけれども、じゃあ消費者のお母さんたちが買っている物って本当に欲しい物を買っているのだろうか。

「土農工商」という言葉がありますよね。小さい子どもに聞いても中学生ぐらいの子どもに聞いても、農は生きる生命産業だと言っているけれども、農家仕事は土で汚れるから嫌という子どもも出てくると思います。農業の大切さは知識にはあっても意識にはないんですよ。農が大事というのは教えられちゃって覚えているだけで、本当に思っていない。

今の私は、知らないことがまだいっぱいあるんです。知らないことは聞こうと思っています。たとえば、農薬ってどうやって作られているのかっていうこともわからないので、若妻会のみんなで「今度、化学肥料の工場とかに、視察とかしてみよう」という話になったんですけども、誰もそんなことしたことないんです。作っている現場がどんな所かも想像できないんです。だから分からないことや知らないこと

には積極的に取り組んでいこう。あって当たり前で、使って当たり前という感覚から、なぜ自分がそれを使うのかということを考えていくようになりたいたいと思っています。

太田原 そういうことを考えていけば、水俣病なんかは出なかつたかもしれないですね。あれはまさに肥料工場が出したわけですからね。やはり若い世代で行動を起こしていくということになりますかね。最後になりましたが、いままでのコメントを藤原さんにお願ひします(笑)。(これからやろうと考えていることなども一緒に)。

## “食育”を発信する施設を作りたい

藤原 本当に知らないことを聞くということはすごく大事なことなんですけれども、今まで何十年も農業をやってきたら、たとえば農業に関しても使っているから知っているって周りも思っているし、自分たちも今さらという思いがあったと思うんです。そういう中でやっぱり新規に農業を始めようという人は、その時が何歳であつても一からの出発だから、やはり聞きやすいし疑問も持ちやすいし、素直に持った疑問をぶつけるということは大事なことだなあと思いました。

そういうことでは、自分の財産形成ということも大事です。肥料や農薬の勉強をするのと同じに、もっとお母さんたちは年金のことだとか保険のことだとか遺産のことだとかも勉強が必要だと思ひます。全道の農村女性が札幌に集まって情報交換をする「農村女性フェスティ

バル」というのがあつて、そこで「自分名義の土地を持っていますか」と聞いた時に、手を挙げた人は一人だけだったんですよ。その人は自分で自分名義の土地が持ってたかというのと、旦那さんが死んでやつと自分名義の土地を持てたというのです(笑)。笑い話とも言える状況でしょう。だから私はもっとお母さんたちがそういう分野にも意識を持って、自分の働いた労働対価というものを適正に請求するというか、貰つてもいいのではないかとしような、そういう勉強会もこれからは必要ではないかと思っています。

スイスに行った時に、農村婦人連盟というのがあつて、女性のリーダーを育てる講座というのがあつて、そこでは旦那さんと結婚する時に契約書を交わすという話が出たんですよ。私はまさにこれは今、日本で行っている家族経営協定だなあと、本当によくわかつたんですよ。そういう契約書を交わせる勇氣ある女性を育てていくということも、スイスの農村女性と日本がタイアップしてやっていると聞くと、なと思つたんです。もう一つは、スイスの農業人口は4%ですが、スイスのイメージといえば「アルプスの少女ハイジ」のイメージとか、ゆつたり牛や羊が草を食んでいるきれいな牧草地という情景ですよ。そういうことはスイスも大事にしているんですよ。だから環境直接支払制度というのがあつて、それで自分たちもあいう景観を守っていくことができるということでした。

今、「米政策改革大綱」で売れる米を作らなければだめだ、売れる農産物を作らなければだめだと言っているけれども、私はその中に景観もあつてもよいのではないかなと思ひますよ。農産物は輸入できても景観とかその田舎で生きているホタルとかの生き物は、そ

の景観をなくしてしまったり取り返しがつかない。それはまったく輸入できない物なんですよね。だから私は、この間役場の方から地区懇話会というふうにやっていったら良いかと相談があった時に、売れる農産物を作ることも大事だけれども、景観もぜひ対象に入れてほしい、景観作物も売れる産物の中に入れて対象にしてほしいということ強く言いました。

ところで、「食べる」ということは一日三回、三六五日、一年間に千回は食べることです。本当に食べることは大事なことで、それは農業とも直結していることから、それを何とか大事に育てていきたい。食育というのは、体育とか知育と同じように大事ですよ。新聞などで見かけますが、「一人で食べるより何人かで食べたほうが一品おかずが多くなるとよね」という共食、共同で食べるということの大事さです。私も若い人たちと持ち寄りで夕食会をするんです。持ち寄りだから、私と夫とばあちゃんと三人で食べるよりは、四家族が集まったらそれなりに品数も多くなるんですよ。だから私は、そういうことから「食育の大事さ」を伝えていきたい。

それに、「地産地消友の会」もやっています。地元には、いろんな給食を配っている老人施設とかがあります。そういう中で地元の物を使ってくださいとお願ひしています。町が委託している先ならなおさらのことです。お母さんたちとその特養（特別養護老人施設）に行つて話を聞いてきたんです。及川さん家のアスパラは良いんだけども「今日アスパラ何kg お願いします」とか、個人的に電話で注文して個人的に持って来てもらうのはなかなか大変だということなんですよね。その中でも、「まとめてくれたら地元の物を取れないことも

ない」と言っていますよ。一ヶ所にファックスで注文を送つたら、農家のほうから様々な野菜などをまとめて何時に納めることができるというんだつたら、「地元の物をとれないこともない」という返事をもつたんです。

それで私は、その農と食の拠点となる仮称「食育センター」というのを立ち上げることが夢なんです。お年寄りに地元のものばかりで作つたお弁当を配食するとか、地元の給食を作っている所には地場産の物を使つてもらふようなコーディネーターをする人がそこにいればいいと思います。お母さんたちは作つたりするのはすごく上手です。だれどそれを商売に結びつける手間ひま、時間がなかなかとれないんです。だからそういうことをコーディネーターしてくれる拠点が必要だと思ふんですよ。娘夫婦がうちの仕事を一緒にやるということになれば、私はまた一歩夢を実現させることができるのかなあと、今はそつちのほうに頭が向いているんです。私はそこでもうひとふんばり、次の子どもの教育のためにも、食育ということを、町の人に発信する施設をつくるのが夢です。

太田原 ありがとうございます。食育センターの話、雑誌の話、それから若い世代のお母さんたちのグループの学習なども、私自身が関わってきたこと、またこれからやりたいなあと思っていることと皆さん方の夢が一致しましたので、大変わが意を得たりと思ひました。皆さん方のお話から農業・農村の輝く時代が薄つすらと見えてきたところで名残惜しいのですが、座談会は終わらせていただきます。どうもありがとうございます。





(写真右より)

プロフィール

Profile

## 長尾 道子

「食農わくわくねっとわーく」事務局長  
エッセイ「北海道大好きな旅」NO 45～48連載

## 太田原高昭

北海道地域農業研究所所長、北海道農業顧問  
北海学園大学教授、北海道大学名誉教授

## 藤原 幸子

愛別町農業経営（酪農）、愛別町議会議員  
北海道指導農業士（平成7年度認定）

## 及川かをり

蘭越町農業経営（野菜）平成13年新規就農  
エッセイ「農業は感動産業です！」NO 49～連載中